

志津川保育所訪問報告

6月2日、台風が過ぎた後の曇り空の中、鉄道で三駅手前にあたる柳津駅近くからで20キロの志津川保育所を訪問しました。仙台駅からバスで柳津三丁目、タクシーに乗りついて12キロ地点までは、何事もなかったように眩しい新緑とのどかな風景が続いていました。が、志津川保育所まで8キロ地点から、灰色の世界。跡形もなく飲み込まれた家（があったといわれないとわからない）の跡、枠だけが残る女性が放送を続けた防災センター、生活の足の確保のために給油車が通れるだけの幅をした仮設橋と続き、震える思いでした。頼りにしている自衛隊の駐屯所、未だに水が復旧しないため毎日かかせない給水車、メーターボックスらしきものの残るガソリンスタンドだけが、かろうじて「色」を確認することができ、手付かずの瓦礫は山にすることもできずにあの日のままでした。

見上げるほどの高台にあり、こんなに高い場所まで津波がギリギリやってくる直前に、よく子どもたちは避難したな、と驚くほどの坂を上がると、何事もなかったように志津川保育所は建っていました。園庭には水がきたそうですが、建物に被害はなく、南三陸町では震災後はじめて、10日から保育を再開するための準備に追われる職員5名の皆さんが出迎えてくださいました。

5月31日に他より優先して電気を通してもらったとのことで、明るい園内には各地保問研をはじめ、多くの皆さんから届けられた様々な保育用品が開所を前に並べられていました。まだ、ご家族が行方不明の方や家を流された保育士の方も、「皆さんから物資をいただいたことで躊躇していた気持ちを乗り越え、動き出すことができました。保育所が再開しないと仕事ができない。探しに行かれない。仕事をしないと町全体が動かない。何よりも保育所の再開は優先されなければ。」と力強くお話してくださいました。

また、物資の箱をあけた時には子どもたちが笑顔になることは勿論、大人たちが「これまで知らなかった画材」に夢中になったり、一緒にあそんだりすることができ、物資が整うだけでない届け物をいただいたと喜んでおられたのが印象的でした。直接、皆さんに御礼を伝えられませんが、どうぞ宜しくお伝えくださいと伝言と南三陸町長からの手紙を預かり集会で報告させていただきました。

6月10日からはまず、84名でスタート。ひとつ区切りを迎えられましたが、多くの課題が残されています。物資は充足しましたが、形を変えた支援を今後とも継続し、つながり続けたいと思います。

(記：全国事務局 福岡 慶)